
笑子さんの場合

てるり

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

笑子さんの場合

【コード】

N7498A

【作者名】

てるり

【あらすじ】

一人で子供を育て上げ、いまも社長秘書をしている、笑子さん。しかし、問題は常に傍らに……。

1話 笑子さんの苦悩

笑子さんの苦悩

会社社長の秘書である笑子さんは苦悩していた。

「はあ。」

ため息も深い。

さて、笑子さんが悩むことといったら？

笑子さんの家族は、息子が一人だけだ。夫に早くに先立たれて少々苦労をしながら、息子を育て上げたが、彼は農業関係の仕事につきたいからと、現在地方の大学に行っている。さみしいのは少々あるが、悩むような問題ではなかった。

家庭と来れば次は仕事だろう。しかし、笑子さんはリストラの心配も今のところはなさそうだ。また、会社の社長も女性である為、言い寄られるというようなこともなかった。

その心配はない。しかし、悩みの種は社長だった。

笑子さんが最初に、社長の秘書になると聞いたときに、彼女の同僚は、ある噂を教えてくれた。

「あのね、なんでも、重要な書類にヒーローのアニメを書いたんですって。」

「ヒーロー？」

「ええ。お兄さんがいるらしくって、その影響で戦隊もののヒーローが書けるそうよ。」

「それで？」

「それでね、相手の社長が、そのヒーローのファンだったらしくって、契約が成立したんだって。すごいわよねえ。まあ、あくまで、噂だけ。」

彼女はそう言った。

しかし、それは噂ではなく、事実だったこと笑子さんは後に知っ

た。

「はあ。」

何度めのため息だろうか、笑子さんは机の前に置かれた「辞表」とかかれた封筒を見つめている。出そうか、出すまいかの悩みではなかった。なぜなら、「辞表」はすでに提出されているからだ。ではなぜ、まだここにいるのか。

「辞表」が受理されないのだ。

「だーめえー。」

と、いう社長の言葉で却下された。

一度目はそれであきらめた。

二度目は本当にやめようと思って、出社せずにいたら、笑子さんの携帯にも、家の電話にも電話がかかってきた。それでも、ほっといたら、家にまで直にやってきたのだ。

三度目は息子の大学にまで電話がいき、笑子さんの田舎までやってきたのには、さすがに笑子さんは脱帽した。

そして、これは、四度目の「辞表」である。

「笑子さあーん。」

隣のドアの向こうから、社長が呼んでいる。何度も、自分と呼ぶときは苗字の、林でお願いしますと言っているのに直らない。

「社長。私を呼ぶときは、林、でお願いしますよ。それで、御用は？」

「二日酔いの薬持ってきてえー。」

笑子さんは、無言で薬と水を置いた。

「あー、さすがに、多かつたわあ。飲みすぎたわあ。」

その女性は少々たるそうに言った。社長の礼子さんという。

「そうですね。まあ、あれだけ飲めば、当然のことでしょうね。」

笑子はあるさりと言った。

「つめたあーい。いいじゃなあーい。そのおかげで、他よりも三割も安く降ろしてくれるのよあー。」

社長はにこやかに言った。しかし、笑子さんはにこりともせずと言

った。

「社長、忘れていませんか？負けたら、一週間、私を貸し出すというのを代わりに提示していましたよ？」

「そんなこと言った？」

「言っていました。」

「あら、そうだった？でもいいじゃない。勝ったし。」

笑子は少々抑えたように言った。

「いいですか？どこの世界にアルコール販売大手の社長に酒で勝負を挑む人がいるんですか？それも、どれだけ、飲んだと思ってるんですか！」

しかし、しまいには怒鳴っていたようだ。

「ああ……大きな声出さないでえー。」

社長は顔をしかめた。だいぶ、二日酔いがきているようだ。

「あれだけ飲めば、二日酔いも当然です。」

「つめたあーいいいい。」

「勝手に、貸し出しの対象にされたら、誰でも怒ります。」

「せっかく、笑子って名前なのに、笑顔がないわー。わらってえー。」

なにやら、笑子さんの中で、切れたらしい。

ばんっ！

「失礼します。」

笑子さんは出て行った。

「あら、また辞表……。」

机の上に置かれた封筒を見ると、そのままゴミ箱に捨てた。

そして一本の電話をかけた。よく見ると、内線のランプが付いている。

「あ、私よ、そう、礼子です。あのね、ちょっと聞きたいんだけど、笑子さんが旅行に行く予定あるかしら？外国？いつ？ああ、そうなの。ええ、行かないわよ。ええ。ありがと。」

礼子は、にんまりと嬉しそうに笑った。

2話 笑子さんの憂鬱

笑子さんの憂鬱

笑子さんは、毎日の事ながら、会社に行くのが憂鬱だった。仕事
がきついわけでもなく、したくもない仕事をさせられているわけ
もないのに、なにゆえか。

林 笑子さんというのは、息子を一人持つ母親、兼、社長秘書をし
ている。社長も女性で、二人は仲良しだ、と、社長だけは思ってい
るのだった。

誰であろうと、勤めているからには、一回や二回は会社に行きた
くないことだってあるに違いない。しかし、笑子さんの場合、ちよ
つと違った意味で憂鬱だった。

「笑子さあーん。」

いつもの口調で、社長の礼子は隣の部屋にいる秘書を呼んだ。な
ぜか秘書のことを苗字ではなく、名前で呼び、笑子さんは毎回修正
するところから話が始まる。

「林と呼んでください。ご用は？」

「あのねえ、午後からの会議、何来て行くところかしら？」

これが、秘書に聞くようなことだろうか。ついでに、着替える必
要もみられない。

「……。いまの格好で結構です。着替える必要もありませんし。他
にご用はありますか？」

「ないわ。」

「では。」

ぺこんとお辞儀をして出て行った。その五分後。

「笑子さあーん。」

「林と呼んでください。ご用は？」

ドアの中には入らず、顔だけ出して聞いた。

「コーヒーが欲しいわあ。」

「いま、入れさせます。他にご用は何か？」

「ないわ。」

「では。」

お辞儀も面倒になつてきてきようだ。三分後。椅子に座つて、コーヒーを入れるように言うだけしかできなかった。

「笑子さあーん。」

「林です。何か？」

さすがに、だんだん面倒さが出てきているようだ。やっぱり、顔だけを出した。

「ホツチキスの芯がないのー。」

笑子さんは無言で、引き出しから出して芯を取り替えた。笑顔のかけらもないといったところだろうか。コーヒーが運ばれてきたが、運んできた女性はなにやら不穏な空気を読み取ったのか、さつさと出て行った。

「他に、ご用は？」

「ないわ。」

「では。」

ドアのノブに手をかけると。

「あ、笑子さん。」

「林ですが。なんででしょう？」

さすがに、顔はげんなりしていたが、社長の方を向くときには普通の顔に戻しているところは、さすががかもしれない。

「今日の午後の午前中に行った工場の視察報告と予算の見積もり、それと、あさつて行くのはどこだったかしらあ？」

たまに、こうやって、真面目な問題が出てくる。この差に笑子は三年かかって、やっと少し慣れてきた。

「プラスチック工場です。視察報告と予算見積もりは、いま、やつております。社長が私を呼びつけないでくれましたら、今日中にできます。」

「つめたぁーい。」

「他に用は？あったら、今、すぐに思い出してください。」

「ないけど。」

「では。」

笑子さんはため息をついて、椅子に座った。すると、電話が鳴った。しかし、笑子が出なかった。誰からの電話だか、わかっていないから。しかし、鳴り続けているとうるさい。かといって、他からの電話もくるので、線ごと切ってしまうわけにはいかなかった。もし、できるなら、とつくにしていたことだろう。さすがに、観念して電話に出た。

「はい。」

「あ、笑子さん？あさつてのプラスチック工場見学、なに来て行くかしらぁ。」

「……。どんなの、持っていらしゃいました？」

笑子はスピーカーにして、社長にしゃべらせたまま、仕事を進めた。そして、毎回、こんな調子でなぜ会社がつぶれないのか、いろいろと理不尽に思う笑子だった。

これのため息をつくなというほうが無理というものだ。今日も笑子さんは憂鬱だった。

3話 笑子さんの調べもの

笑子さんの調べもの

普通は、社長よりも秘書のことが先に来ていることのほうが多い。しかし、なぜか、今日は社長の方が先だったようだ。彼女の場合は、自分で運転してやってくる。

事故があつては大変だからと、ハイヤーを出してもいいと、笑子さんは常日頃から言っているのだが、礼子に断られ続けている。

「運転は、ストレス解消なのよ。」
そう言い張っている。そして、飲みに行くことと決まっている時は電車でやってくるのだ。

笑子さんは時計を見た。まだ勤務時間になっていない。

「笑子さあーん。」

今日も笑子さんの会社での一日は、社長の礼子からの声が始まる。そして、笑子さんも自分の名前を直すところから始まるのだ。

「おはようございます。林です。なんででしょうか？」

「ねえー、突然なんだけど、クラゲって淡水でも生きられるの？」

笑子は一瞬悩んだ。どうなんだろう？しかし、嘘についても問題だ。

「さあ、どうでしょう。調べますか？」

「お願いー。」

礼子にはこやかに微笑んだ。なにやら、パソコンに向かっている。

「わかりました。」

笑子はすぐ近くの本屋に出かけた。早い時間から開いているのがこの売りである。

以前に、礼子に同じようにある魚のことを調べてくれと言われて調べたら、取引相手の好物の魚だということが後からわかった。そ

れ以来、笑子は調べる理由を聞かなくなった。理由があってもなくても、どうせ調べることになり変わらないからだ。

図書館もあるのだが、この時間では開いていない。

会社には当然の事ながらインターネットもあるのだが、礼子は言う。

「本より、ネットのほうが嘘をつく確率が高いわ。」

賛否はさておき、笑子には否定できる材料も見つからないので、本を買っている。

会社に戻る途中で笑子は自分の同僚に会った。たったいま、出勤してきたらしい。

「どうしたの？そんなに本持って。また？」

彼女は目を丸くした。

「社長がクラゲについて調べろって。」

「酒の次は魚で今度はクラゲかあ。」

同僚は感心したように言った。

「うちの会社である本屋の利用の多さはあなたがきつと一番多いわね。」

そうかもしれないと、笑子も思った。

何回も同じ場所で、この同僚にあっているような気がする。そのときは、鹿児島でしか手に入らない、酒について調べているときだった。

「じゃ、ちよつと急ぐから。」

同僚に軽く別れをつけて会議室にこもった。さっそく、本をめぐってみる。ふと、子供と一緒に言った水族館のことを思い出したが、すぐに仕事に戻った。

「遅くなりました。ありがとうございましたよ。」

しばらくして笑子は戻ってきた。一枚の紙切れを持って。どうやら、これにまとめてきたようだ。そしてそれを読みあげた。

「クラゲにはいろいろな種類がいるようです。思った以上に多かったです。真水でも、生息するクラゲがいます。」

「いるのねえ？」

「はい。また、海水で生まれて、淡水で生活して、また、海に戻るようなクラゲもいるようです。ペットとして飼うこともできるようですよ。名前はこの紙に書いておきました。名前で引けば、インターネットで映像も見られると思います。ざっとわかったのは、これくらいです。どうでしょうか？」

「ありがとうございます。いまのところはそれで十分よ。」

礼子はその書かれた紙を受け取った。

「では。」

ペロリと頭を下げて笑子は社長室からでていった。それと同時に、勤務開始のチャイムが流れた。それを聞いて、笑子は思い出したように言った。

「いまから、スケジュール帳を取ってきます。」

笑子が、手帳を取りに行っている間に、礼子はなにやらメールをパソコンでうち始めた。

そしてうれしそうに画面を見つめてにっこりと笑った。

笑子が戻ってくる。

「今日のスケジュールですが……。」

こうして、笑子さんの今日の調べものは終わった。

4話 笑子さんの怖いもの

笑子さんの怖いもの

笑子さんが、はかなくて、か弱い女性（だったとしての話だが）という年齢をとくに超えていたとしても、怖いものくらいはある。しかし、それは、幽霊や雷、虫といったような一般的なものではない。

秘書をしているせいも、脅迫文が来ることもある。しかし、それよりも怖いものがあった。それはなんだろうか。

「ねえ、十五日からってなにかあった？」

社長の礼子は聞いた。

「十五日ですか？えつと……。」

笑子は手帳をめくった。昔はこんな物を使わなくても頭に入っていたものだが、この年齢になるとそうはいかないようだ。

「いいえ、特には。通常の仕事です。」

「じゃ、あなた休んで。」

にこやかに、礼子は言った。

「はい？」

「息子さんの大学の文化祭でしょう？」

「……そうでしたか？」

冷たい母親だと言われるかもしれないが、笑子はまったく記憶になかった。いや、息子が未成年だというならまだしも、もう二十歳を超えている息子の文化祭など記憶にあるわけがない。

「そうなのよ。行きなさい。」

「でも、別に、行かなくてもいいんですが？」

「ダメ。社長命令。」

つまらないことで社長命令を使うものだ。

「わかりました。」

とりあえず、素直に返事をしたものの、笑子が行ったことにして、家の片付けでもしようかと考えていた。

十五日、朝。電話が鳴った。

「はい。」

「あら、笑子さん、まだいたの？」

「じゃ、社長……。」

携帯だと、どこからかけているか表示されるからと、自宅の電話にかけてくるこの用意周到なこと！

「早く行かないと、私、会社休んで、そっちまで行くわよ？」

「いまから行くところです。」

本当にきそうなところが怖い！さすがに、社長にいきなり休まれるのは困る。

笑子のため息をつきながら、行くと言ってしまったのだから、しょうがない。しぶしぶながら、笑子が出かけることにした。息子は農業関係に行きたいと、ちよつと離れた大学に行っている。本人も寮生活をしていて、年末意外はあまり会うことはない。しかし、笑子はそれでいいと思っていた。

「母さん！」

思ったとおり、息子は目を丸くしていた。

「どうしたの？」

「たまにはいいでしょ。」

まさか、社長命令だとはいえない。

「勝手に見てくるから。」

さすがに、息子に案内させるのは気が引けた。しかし。

「いいよ、別に。案内くらいするよ。」

と、息子のほうから言い出してくれたので、笑子は頼むことにした。その夜。社長の礼子の下に、メールが届いた。

『母が来てくれました。ありがとうございます。』

礼子にはっこりと笑った。

帰りの家までの道を歩きながら、笑子はなんで社長が自分の息子の

笑子さんの場合

文化祭の日程を知っているのだろつと考えていた。あの記憶力ほど怖いものはない……。

5話 笑子さんの秘書仲間

秘書仲間

笑子さんは社長秘書をしている。ところで、笑子さんがこの社長の秘書になったのは三年前だ。と、いうことは当然のことながら、それ以前にも秘書がいたことになる。

その秘書は男性だった。今現在何をしているのか。同じ会社で清掃員をしている。

これはあまくまでも噂だが、彼は横領が発覚して、クビになりかけた。それを社長の令子さんが反対。そのまま清掃員にしてしまったという話である。

「なんでもねえ、外国に行こうとしたら、パスポートを取り上げられたらしいわよ。横領した分、働けて言ったらしいわ。」

笑子さんの同僚は言った。

そんな話を聞いた、三日後のことだった。移動のためにその日、玄関へと礼子と笑子は向かっていた。当然、受付の社員達も立ってお見送りだ。

「覚悟！」

静かだったはずのフロアに大声が響いた。清掃員が襲ってきた。

慌てて笑子は社長の前に立ち、ガードマンは彼を取り押さえた。腕をねじ上げられて、抵抗しなくなったのか、なにやら、ナイフのようなものが落ちた。

「あらあら、また失敗ね。」

礼子のため息をついた。

「そんなことじゃ、出世できないわよ。じゃ、行きますよ。」
礼子は笑子に言った。

「まっってください。今、この人は社長を殺そうとしたんですよ？警

察に連絡を。」

「ああ、いいのよ。」

行こうとした、ガードマンを止めた。

「社長。」

「離してやって。」

「はい。」

礼子はナイフを拾った。

「ほら、マジック用のナイフなのよ。刃がちゃんと隠れるようになっていてるでしょう？前はペイント弾だったわよねえ！」

「なんで……。」

啞然として、笑子はすっかり敬語を忘れていた。

「あのね、私を倒したら、この会社を辞めてもいいわよって言うてるのよ。ねえ、正明君。運動不足なんじゃない？息が切れているわよ。」

「社長。名前で呼ばないでくださいよ、何度も言いますが、私は東です。」

その清掃員の男は、ねじ上げられた時の腕が痛むのか、顔をしかめながら言った。まだ息が切れている。

「あの……お知りあいですか？」

笑子はおそろおそろ聞いてみた。

「ああ、紹介するわ。こっちが秘書の笑子さんよ。こちらは前の秘書の正明君。」

笑子は目を丸くした。ではこれが前の秘書？

「どうも。東です。」

その男は意外にもきちんと挨拶をした。

「あ、林です。」

慌てて、笑子もお辞儀をした。

「そうそう、ガードマンさん、後で名前を覚えてくれる？昇給しておくわ。」

「はあ。」

さすがに、ガードマンのほうも啞然としていた。

「じゃ、行きますよ。あ、正明君、また来月挑戦してね。」
礼子はさっそうと会社から出て行った。

「なんで、危険だと知りながら、雇っているんですか？」

「あら、だって、誰が私を守ってくれるか、一目でわかるでしょう？」

にっこりと、笑って礼子は車に乗り込んだ。その後ろ姿を見て、笑子は思った。一体、何を考えているのかさっぱりわからない！
ついでに、事件を起こすのもやめるいい訳にはならないと思いついた。

6話 笑子さんの情報源

笑子さんの情報源

ある日のこと。

「ねえ、笑子さあん。」

「林です。なんででしょう?」

「来月の末ってなにかある?」

笑子は手帳をめくった。

「……いまのところはなにもありませんが?」

「じゃ、私休んでいいかしら?」

「構いませんが、なにかあるんですか?」

「亭主と息子の墓参り。」

笑子はうなづいた。

「ああ、わかりました。でも、ご子息は亡くなっていませんからね。」

「

「わかつているわよっ。」

ふくれつつらをして礼子は言った。初めて、笑子が社長秘書になったときに、同じ頃に言われたことがあった。

「亭主と息子の墓参りに行ってきてもいいかしら?」

そう聞かれたら、普通なら両方とも亡くなったのだと思うだろう。

笑子も最初は信じた。そして、悲しく思ったものだ。自分には息子がいる分だけでした。たのたのだろうと。しかし、その日の涙ほど返して欲しいと切に願ったことはなかった。

当日になって、笑子は彼女の同僚から聞かされることになる。

「え? 息子さん? 死んでないわよ。」

「え、だって、墓参りって。」

「ああ。ご主人は確かに亡くなっているんだけど、墓参りに息子さんに行くのよ。息子さんとは大喧嘩しているの。それも、くだらな

い理由なのよ。なんだと思う?」

「なんだか、嫌な予感がするものの、笑子は聞いてみた。
「なに?」

「息子さんが社長の見たかったドラマの録画を忘れたの。」

「しばらく、笑子の思考が止まった。

「……え?それだけ?」

「そう。もう六年くらい?ずっと喧嘩しっぱなし!アホみたいでしょ?」

「……うん。」

次の日、聞いてみた。

「ご子息は亡くなっていらっしやらないんですね?」

「たちまち、礼子是不機嫌そうになった。

「そおよおー。でも、いないのと一緒よ。あたしが見たかったドラマを撮り忘れるなんて、親子の愛がないのよ!それもあやまりもしないで!あの頑固なの、誰に似たのかしら?」

笑子は思った。そんなことで親子の愛を決められるものなのだろうか。頑固は誰か?鏡を見ればわかるだろうと。しかし、そんなことも言えず。

「それで、お墓参りというのは?」

「会つものよ。一年に一度ね。それさえも、腹立たしいわ!」

笑子のため息をついた。それから、三年たっても、なにも変わらなかった。

「まったく、頑固者が!あー、腹が立つ!」

カバンごと、机に放り出した社長に向かって笑子は言った。

「あんまり、怒られると血圧が上がりますよ?」

笑子はすっかりこんなことくらいには、慣れたように言った。

ドラマはもう、何度も放送しているのに、いまだに仲直りしていないようだ。

それにしても、と、笑子は思う。あの同僚は一体どこからいどんな情報を得てくるのだろうか?社長の息子さんの頑固さは誰からの遺

笑子さんの場合

伝なのかという点よりも、そっちのほづが謎のような気がしている笑子だった。

7話 笑子さんの嫌な予感

笑子さんの嫌な予感

普通、いやな予感というものは、なんとなく感じるものだ。しかし、笑子の場合、同僚の彼女が小声で話し始めると、必ず、感じるものでもあった。

「聞いて。最近、社長、ゲームに夢中になっているらしいの。」

それは笑子も知っていた。さすがに、会議中に、ゲームの音が急に鳴り出したときは、あせった。携帯の音だとかまかしてみたが、相手にそれで納得していただいたか、よくわからない。

「それとね、着物。」

「着物？」

これは笑子は初耳だった。

「そう。裏の向こうの通りにある着物屋で見かけたって子がいたの。それもここ最近、何度もよ。自分は着ないのに。」

「そうねえ。」

笑子も同意した。正月だろうが、なんだろうが、彼女が着物を着ている姿など一度も見たことはないのは事実だった。急に着物になにゆえ興味を持ったのだろう。

「でね。ひそかに言われているのが、着物をぬがせるゲームでも作るんじゃないかって。」

「はあ？」

思わず大声を出した。慌てて、同僚は口に指を当てたが、遅かった。それが社長室まで聞こえたのか、社長の礼子の声が出た。

「笑子さあーん。」

「あ、行かなきゃ。」

笑子は慌てて、社長室へと向かった。

「林です。お呼びでしょうか。」

「これと、これ、どっちがいいかしら？若いお嬢さんになんだけど。」

同僚のいつていたことが頭に浮かぶ。なぜ、着せるのではなく、脱がせるゲームなのか、需要の問題だろう。笑子は二つの着物の写真を見比べていった。

「こっちのほうが。華やかに見えます。」

「そう、じゃ、こっちにしようかしら。」

「どうするんですか？」

「送るの。」

「どなたに？必要でしたら、手配いたしますよ。」

「あら、お願いできる？このゲーム作っている会社に私の名前で。」

礼子は、インターネットで調べて、印刷した会社がかかれた紙を差し出した。

「それは、かまいませんが、差し付けなかったら、理由も聞いてよろしいですか？」

「送る理由？この間、会議中にゲームの音が突然に鳴ったでしょう？」

礼子は渋そうな顔をした。

「ああ、あのゲーム機ですか。」

「ついこの間のことだから、まだ笑子も忘れていなかった。」

「そう。会議中ならまだしも、取引先の前で鳴ったら、失礼でしょ。文句を言ったら、振動型の開発をしてくれるっていうから。その御礼。」

にこやかに礼子は言った。そんなことで文句を言われたゲーム会社も迷惑な話だろう。それに、振動タイプを断れなかったのではないだろうか。

笑子はその紙を見ながら言った。

「この会社、今度、経営系のゲームを出す会社ではありませんか？なにかで、見たことがあったような気がします。」

「そうよ。うちの子会社のコンビニが、協力しているの。」

だからかと、笑子は思った。当然、もつと上の会社の、しかも社長の頼みを断れるはずもない。

笑子は言った。

「いいですか、その前に、会議中でもゲームはしないでください！
持っているところを発見したら、没収しますからね！」

笑子は断言した。

「えー。」

「えー、じゃありません！それより、この手配はしておきますから、早く、この書類たちにはんこを押してくださいよ！」

礼子の机の上に乗っていた、仕事はほとんど進んでいなかった。

同僚の言っていたことにはならなさそうだが、余計に笑子の仕事が増えそうだと思った。

ゲーム機の没収！いくつなんだと、笑子は自問自答をしていた。

8話 笑子さんのエイプリルフール

エイプリルフール

「笑子さあーん。」

「今日も、かわらない口調で社長室から呼び出しの声が聞こえてきた。」

「林です。なにか?」

「あなた、今日でクビね。」

「はい?」

「今日中に荷物まとめてね。」

社長の玲子はいつもと変わらない笑顔でにこやかに言った。さすがにいつも冷静な笑子でも目を丸くした。

「あの……ずいぶん急なお話なんです、よろしかったら理由などお聞かせ願いませんか?」

「あなた辞表出していたでしょう?あれが受理されたの。」

「……そうですか。わかりました。」

少々戸惑いながらも、笑子は社長室を出て行った。急に頭の中が真っ白になった。

急にクビ?明日からどうしよう。引継ぎはどうするのかしら?誰が後を継ぐのかしら?退職金出るかしら?今日までのお給料は出るのかしら?でもクビなら出ないわね。辞表はたしかに出しているんだけど、なんでかしら、急に。

あれこれいろんなことが頭の中をぐるぐる回っていた。

「どうしたの?なんだか、顔色が悪いけど。」

同僚が心配して、声をかけてきてくれた。

「あのね、クビになったみたい。」

「クビ?なんで?なにかやったの?」

同僚は啞然としたように言った。もし、笑子が普段から冗談を言

うような性格をしていたら、とてもじゃないが信じてもらえないに
違いない。

「そうじゃないけど……。」

笑子にだってよくかわかっていないのに、どうやってうまく説明
などできるだろうか。

「とにかく、急な話で驚いているんだけど。」

同僚はしばらく考え込むと、急にカレンダーを見てから言った。

「待った。今日、四月一日だわ。」

「それが？」

「エイプリルフルじゃない。騙されているよ。」

「でも、いままでそんなこと、やられたことなかったわよ。」

しかし、同僚は指を振って言った。

「甘いわ。去年、会社が倒産しそうだって噂聞いた？」

「聞いたわ。どうしてそんな根も葉もないような噂が流れたんだろ
うって思ったもの。」

「あれ、社長が出したの。」

「え?!」

「おととしは、副社長が海外に飛ばされるところだった。家族にま
で宣言してさ。パスポトまで取ったのよ。」

「そういえば、それが原因で引退したんだっけ。」

「そう。その前は社長が引退するとか言われていたしね。だいたい、
あんたがやめて困るのは彼女のほうなんだから。今日だけのことだ
と思っ、一日、のんびり過ごせば？」

同僚はやけにのんきに言った。ふと笑子は思った。

「ねえ、前から気になってたんだけど、あなた、どうしてそんなに
社長のことにいろいろと詳しいの？」

「あれ、知らなかった?いとこなのよ。」

同僚はあっさりと言った。

「……誰が？」

「社長が。」

「……ええええええええええ??？」

笑子は今までの中で一番大きな声を出した。

「ホントに?!」

同僚はにこやかに笑った。

「さあ、どうかな?今日はなんの日?」

「エイプリルフル……。」

「ふふふふふ。」

同僚はにこやかに笑いながら去っていった。さて、嘘はどこからどこまでだろうか。笑子は、なんだか本当にやめてもいいような気がしてきた。

日本で、どうしてこんな目に会わなければならないのか、どうも理不尽さを感じている笑子だった。

9話 笑子さんの未来

笑子さんの未来

「笑子さあーん。」

今日も、礼子の声が社長室から秘書室へと響いていた。ノックをしたから、入った。

「林です。おはようございます、社長。」

「おはよー。ねえ、あなたここに勤めて何年になるかしら？」

礼子は唐突に聞いた。

「社長の秘書になってからは四年経ちます。」

「じゃあねえ、お見合いしない？」

なにが、じゃあねえ、なのだろうか。笑子はゆっくりと聞きなおした。

「……誰がですか？」

「笑子さんが。」

「しませんよ、いまさら、そんなもの。」

「なんでよ、いい話なのよ？」

「いい話ならご自分でどうぞ。」

礼子も独身だ。

「あら、私が結婚したらめもるじゃない。」

それはそうだろう。社長が再婚でもすれば必ず、どこからか文句が出るだろう。女性の社長ならなおさらだろう。

「だからって、なんで私なんですか？ほかにもいるでしょう。」

「みんな結婚しているでしょ。」

「しませんよ。」

「会ってみるとか。」

「しません。」

かたくなに断った。

「だって、将来、一人でどうするのよ。息子さん、向こうで結婚するとか言い出すかもよ。」笑子の息子は大学で農業をやるのだと、地方にいる。

「そうですね。まあ、あの子の人生ですし。反対はしませんけど。」
「そうじゃなくて、あなた一人で寂しいでしょ？」

「いーえ。」
「どうして？」

「どうして一人が寂しいって思うんですか？」

「それは……、でも困るじゃない、一人寂しく死んでいたりしたら。」

「そういうことのないように、いまからお金をためておきます。老人ホームにでも入ります。」礼子は言葉に詰まった。

「じゃあ、お話はここまでということ。今日の予定ですが……。」
笑子はスケジュールを話し出した。

「お見合い？」
同僚の女性は、目を丸くした。

「へえ。社長、どこから持ってきたんだろう、そんな話。」

「さあ。」
そういわれると、なんだか気になる。

「まさかき、仕事の取引の条件に持ってきたりしていないわよねえ？」

「そうなら、即刻やめるわ。」
笑子は固く心に誓った。

「笑子さーん。」
「ほら、呼んでいるわよ。」

「苗字を呼んでくれて言っているのに。」
ぶちぶち言いながら、笑子は社長室に入ってしまった。

「林です、なにか。」

「明日暇かしら？」

「仕事です。」

「あさつては？」

「仕事です。」

「じゃあ、明日の仕事、この取引先に行ってくれる？」

「仕事だけなら。」

仕事の部分を強調した。じつと、礼子の目を見つめた。

「そんなに、お見合いはいや？」

「しませんよ。」

礼子はしぶしぶ、あきらめたようだった。

「わかったわよー。じゃ、この種類、送っておいて。」

「はい。」

秘書室に戻ると、同僚は待っていたかのように聞いた。

「どうだった？」

「あきらめたみたい。」

「じゃ、しばらくはやめられないね。こー。」

「どうして？」

「だって、やめたら収入がなくなるじゃない。老人ホームなんて入れないじゃない。」

「それもそうねえ。」

まさかとは思いが、本当はお見合いなどなくて、自分をここに残らせるための作戦だったのではないだろうか、ひそかに、笑子は考えていた。

一方、社長室では。礼子はメールを打っていた。

「これで、しばらくは、いてくれそうね。」

にっこりとパソコンに笑いかけていた。

10話 笑子さんの驚愕

笑子さんの驚愕

「やめる?」

同僚の言葉に、笑子は目を丸くした。

「ううん。やめるんじゃないくて、やめたの。」

同僚はさっさと、自分のいた机の上を片付けながら言った。

「まって、だって、辞表は?出したの?」

「出したわよ。」

「なんでよ!私のほうがずっと出しつづけているのに、なんであなたのほうが受理されて、私のはダメなのよ!」

同僚はちよつと手を止めて言った。

「そおねえ、ま、いろんな理由があるわね。」

「たとえば?」

「あたし、彼女の親戚だし。」

「社長の?ほんとにいとこななの?」

「ううん。もつと遠い親戚。でも、今回この仕事をやめるのは、介護のためだし、それも理由の一つになるんじゃない。」

「それだけ?」

「他にもあるわよ。あなた、社長の昔の知り合いみたいよ。」

「……私が?知っているわけじゃないじゃない!」

「でも、社長のほうは知っているみたいよ。だって、私、あなたのことを調べたもの。」

「調べた?」

「そう、学校とか、職歴とか。一緒に秘書課に来たのも、社長の命令だったのよ。」

「な、なんですって?」

笑子は愕然として聞いていた。

「どうしてあなたの事を知っているのかは、知らないわ。」

「ちよつと、本人に聞いてくる！」

笑子はものすごい勢いで社長室に向かった。コンコン。返事がない。コンコン。ちよつとためらってから、笑子は社長室のドアを開けた。すると。机に突っ伏している。

「社長！」

笑子はかけよつてみると、礼子は顔を真っ赤にして意識もうろうとしていた。

「医者！ 医者呼んで！」

笑子の声が廊下に響いた。

「風邪ですけど、ひどい熱ですね。注射をしましたが、これで明日までに熱が下がらなかつたら、明日病院に連れて行きましょう。」

会社内の医務室に勤務している医者はそう言った。詰め込めば四人は寝れそうな部屋で、礼子は横になっていた。

「わかりました、ありがとうございます。」

「じゃ、私はこれで。」

医者はぺこんと頭を下げ、診察室に戻っていった。

「うーん。」

「大丈夫ですか？」

「うーん。」

唸るだけだ。

「どう、社長。」

荷物を片付け終わったのか、人段落つたのか、同僚が顔を出した。

「明日までに熱が下がらなかつたら、病院だって。ねえ、社長の家族の連絡先知っている？」

「家族って息子さんだけよね？ 全然、わからないわ。携帯でも見てみる？」

「それしかないわねえ。」

二人は社長室に戻った。同僚は携帯を眺め、笑子はパソコンを調べ始めた。

「あつた？」

「ない。家の番号もない……。そっちは？」

「息子さんとメールさえもしてないのねえ。ん？」

「どうしたの？」

「これ……うちの息子のメールアドレス！なんで社長が？」

「あら、だって、メル友なんですよ。」

笑子は金魚のように口をパクパクとさせた。声にもならなかったよ
うだ。

「聞いてないわよ！」

「なんか、秘密裏にやりとりしていたみたいよ。」

「知っているなら、言つてよ！」

「だって、口止めされたんだもん。あ、これだけ、名前がない。誰
かの携帯番号ね。」

「かけてみれば？」

しかし、携帯は現在使われていない声がしてきた。

「だめ、使われてないみたい。」

「困ったわねえ。黙って回復を待つか。聞きたいことも山のように
あるし。」

笑子のため息をついた。同僚と別れて、医務室に戻ると、専務がそ
こにいた。

「専務。」

「やあ、どうだい、彼女は。」

「まだ、熱は下がりませんが、明日にでも、マシになると思います。
」

「そうか、じゃ、私はこれで。」

専務はにこやかに去っていったが、社長の礼子は専務のことを影で
は、「永遠のハイエナ」と呼んでいた。なにをしに来たのだろう？

「えみこさあん？」

呼ぶ声にも力がない。

「はい。」

「せんむはあ？」

「さつき出ていかれましたよ。何しに来たんですか？」

「たぁおれているあいだの、かいしゃのけいえい、まかせてほしい
つて……。」

「承知したんですか？」

「ねたふりしてたぁ。」

「そのほうがいいと思います。とりあえず、安静になさってください。
明日の会議は中止します。あさつての会合は副社長に出てもら
いましょう。いいですね？」

「まあかせるう。」

まだ、頭がもうろうとしているようだ。笑子は医者にも入らな
いようにして欲しいと頼んでから、それぞれの手配に回った。気が
つけば、夜中になっていた。社長はまだ寝ている。

「ええみこさあん。」

「ここにいます。」

「うー。」

社長が自分の名前を呼びながら、うなされているせいか、帰るに帰
れず、笑子は結局医務室にいた。その側で、笑子は考えていた。い
つ、どこで社長と知り合ったのだろうか。

11話 笑子さんへの遺産

笑子さんへの遺産

礼子のことを思い出そうと、とにかく、記憶をさかのぼってみた。どうも、思い出せない。しかし、一番最初に社長に会ったとき、彼女は「始めまして。」とは言わなかったことを、笑子は思い出していた。

それでもいつしか、笑子は寝ていたのだろう。朝、目が覚めたのだから、それまで寝ていたことになる。慌てて、寝ている礼子の方を見ると、顔の赤みが取れていた。

「どうだい？」

医者が顔を出した。

「先生、顔が。」

「ほんと、赤くないね。どれ？」

ひたいに手を置くと、それで起きたのか、礼子が目を開けた。

「あれえ……。」

「おはようございます、社長。」

「えみこさん、ついていてくれたの？」

「ええ、まあ。」

「ありがとうございます。」

「熱は下がってますな。今日一日、無理をしなければ、明日から仕事に復帰できますよ。」

「ありがとうございます。」

礼子はベットのの上に起き上がって、ペコンと頭を下げた。

「お役に立てて、幸いですよ。じゃ。」

医者は部屋から出て行った。

「社長、息子さんの連絡先は？」

「どうして？」

「どうしてじゃありませんよ、倒れてから、どこに連絡したらいいのかわからなくて、困ったんですよ。」

「ああ、家に帰らないとないわ。全部、家に置きっぱなしだし。」
「まったく。社長、近藤さん、やめるんですか？」

笑子は同僚の名前を出した。

「ええ。彼女は、主人の親戚なの。だから、私とも一応親戚。でも、今度、親の介護に専念したいって言うから。」

「うちの息子と、メル友なんですか？」

「そう。最初にあなたが辞表を出した時に、知り合って。直接会ったのは、あの時だけだけど。ちょこちょこメールのやりとりしてた。」

「で、私とはいつ、知り合ったんですか？」

「やっぱり、記憶にない？」

「ありません。でも、最初に会ったときに、初めましてっていいま
せんでしたね。」

礼子はちよつと笑った。

「ふふ。……あれは、高校生のころかなあ。私は荒れていてねえ。

外見も今とは比べ物にならないほど、派手でねえ。家族はみんな忙
しくって、誰も構ってくれなかったせいかしら。寂しくてねえ。当

時は、職員室にも呼び出されてばかりだった。ある日。校長室の鍵
が盗まれたの。」

「鍵？」

「そう。その鍵は職寝室にあつたから、疑われてねえ。取ってない
って言っても、信じてもらえず、ひっぱたかれたの。そのときに、

あなただが来た。」

「お前が取ったんだらう！」

その男性教諭は机をドンと叩いた。

「知るかよ！」

「どこにやったんだ！」

「あたしじゃねえってば！」

「嘘をつくな！」

バシッ

頬を叩いたその音は、職員室の隅まで聞こえていた。

「待ってください。」

その子は、半分濡れたような状態で、スカートから水を滴り落としながら、そこに立っていた。

「なんだ。」

「これ。」

彼女の手の中にあつたのは、鍵だった。キーホルダーで、間違いく校長室のものだと一目でわかった。

「それは……どこにあつた？」

「校門の噴水の中です。男子生徒が投げていました。」

「そうか。」

男性教諭は手を差し出したが、彼女は鍵を手の中にしまいこんだ。

「謝ってください。」

「え？」

「彼女に。彼女は、なにもしていません。」

「だが、こいつがその男子と組んでいなかったとはいえないだろう！」

「言えます。名前は上げませんが、彼は真面目な子です。」

「ふん！こいつに取ってくるように脅されたんだろう！」

「違います。知らないんですか？」

「なにをだ？」

「彼を脅しているのは、校長のご子息ですよ。彼女じゃありません。」

職員室は沈黙に包まれた。

「……。ほんとか？」

「本当だ。」

どこからか声がした。振り返ると。

「校長！」

「校長室の金庫が開けられていた。あれは、私が自分でセットした番号で、知っているのは副校長と息子だけだ。あいつの誕生日だからな。」

校長は寂しそうにいった。

「疑って、申し訳なかった。」

校長は礼子に頭を下げた。笑子は校長に鍵を渡して、職員室を出て行った。

「結局、叩いた先生は謝ってくれなかった。私の親は怒って、私を転校させた。校長は学校を辞めて、息子も転校して行ったと後から聞いた。金庫の中身はテスト用紙だったの。あなたにお礼を言わなきゃいけないと思いながら、結局声をかけられずに、月日が流れた。」

笑子はなんとなく思い出していた。赤い髪をしていた少女を。

「どこの大学に入ったのかも、知っていた。そのまま、この会社に就職して、結婚して、会社を辞めた。子どもができて、幸せに暮らしているのだと思っていた。だから、あなたがこの会社に来た時はびっくりしたわ。それで、知ったの。だんなさんが亡くなったことを。」

「よくそんな昔のことを覚えていましたねえ。」
「ちょっとあきれたように笑子は言った。」

「おおげさかもしれんけど、世界の全部が敵に見えたあの頃、誰も信じてくれなかった。これもあとから聞いた話だけど、みんな誰が取ったのか、知っていたみたい。」

「そうですね。結構、目立つ話でしたしね。おそらく、先生方も一部は知っていたでしょう。」

「でも、誰も助けに来てくれなかった。あなた以外は。それも、制服までぬらしながら。」

「あのあと、風邪を引きましたよ。しばらく寝込むはめになりました。」

た。完全に治ってから学校に行つて見ると、もう校長とその息子は
いませんでした。」

「私もよ。翌日には学校を辞めていたから。転校して、不良はやめ
て、大学にも行つた。先代の社長と知り合つて、結婚して、子供も
生まれた。あの人はもういないけど、会社はうまくいって、大きく
なった。この幸せは、あなたが与えてくれたものでもあるの。そし
て、私はこの会社をあなたに譲ることにした。」

「は？」

「私が死んだら、あなたが社長よ。ずっと秘書をしてきているから、
仕事内容はわかつているでしょう？あれだけやめるのを阻止したし
ね。」

「たしかに、仕事内容はわかつてはいますが。」

「よろしくね。」

礼子はにっこりと笑つた。しかし。

「いりません。」

「笑子さん……。」

「聞きましたよ？副社長から。あさつての会合の相手、どうしてう
ちと提供を組んでくれたのか。水泳で勝負したそうですね？そして、
それに勝つた。」

「あ、あら、だつて、泳ぐのが得意だつて言うから。若い者にも負
けないつて言うし。」

「あちらの社長と、玲子さんでは十歳も離れているんですよ！心臓
麻痺でも起こしたらどうするんですか！」

「でも、死ななかつたわよ。」

「そういう問題ではありません。そのせいで、風邪まで引いて！と
にかく、そんな方法で契約を取り付けている社長の後は継ぎません。」

「

「えー。」

「えーじゃありません。元気が出てきているなら、さっさと寝てく
ださい。明日から、バリバリ仕事してもらいます。」

笑子さんの場合

「あなた、やめない？」

「目を離しても大丈夫になったら、やめます。」

笑子は穏やかに微笑んだ。礼子も、それを聞いて安心したようにベツトに横になった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7498a/>

笑子さんの場合

2009年7月3日19時01分発行